

三重県護国神社奉賛会報

第八十三号



明治天皇御製（明治十六年）

昔よりながれたえせぬ五十鈴川

なほ萬代よろずよもすまむとぞ思ふ

春季慰霊大祭にて玉串を捧げる乙部会長

春季慰霊大祭

四月二十一日・二十二日の両日にわたり春季慰霊大祭が御遺族奉賛会員の御参列のもと厳粛に斎行されました。乙部奉賛会々長の玉串拝礼に合わせ、奉賛会員等が御英霊に感謝の誠を捧げました。

万灯みたま祭

今年も「万灯みたま祭」が七月二十三日より二十五日迄の三日間開催されます。

御遺族崇敬者の方々より心のこもった献灯が、毎年境内所狭しと掲げられます。

万灯みたま祭は、かつて国難に際し、家族と郷土と国家を護らんとし、御盾となり命を捧げつくされた護国の御英霊に万の灯をもってお慰めし、平和を感謝し幸福を祈念するお祭りです。

当会々員よりも多くの献灯頂いておりますが、一灯でも多くの献灯をさせていただきます。ご協賛の程、よろしくお願い致します。なお、期間中お練り合わせの上是非ご参拝頂きますようご案内申し上げます。



特攻花の咲く季節

◇一般献灯

一灯 二千元



鳥居脇に献灯します

◇特別献灯

一灯 五千元



外拝殿に献灯します

会費納入のお願い

『平成二十四年度』は来る八月三十一日をもって終了しますので、本年度会費未納の方は早めに納入頂きますようお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年度会費 正会員 二千元
特別会員 一万円

— 英霊の言乃葉 —

最後の最後の筆を留めます

海軍大尉 齋藤 勇 命



神風特別攻撃隊第一筑波隊

昭和二十年四月六日歿

北海道出身 二十五歳

前略 暫く御無沙汰致しました。皆様御変わり無くお過しの事と存じます。私も相変わらず元気に御奉公致して居ります。

(中略)

二月程前待ちに待ちたる特攻隊小隊長を命ぜられ只今猛訓練を致して居ります。実は募集が三度も之までに行いましたけれども常に熱望を書いたものです。

愈々あと数日を出でずして南方へ此処筑波より進撃する事になりました。想へば生を享けて二十五年、色々とお世話にもなり御心配を御掛けした父母様、兄上様、嫂様、姉様方に厚く厚く御礼を申し上げます。この御恩は今こそ盡忠と共に御返し出来る

事と深く深く信じて居ります。今出撃前に当り淡々として考ふる事無し。只々如何にせば敵に突当り得るかそればかり念頭に有ります。

最後に大学時代より現在に至る迄親身も及ばぬ御世話になった鈴木様には私の亡き後よろしく申して下さい。

生き馬の眼を抜く東京によくこんな親切な人があつたものをつくづく思ひます。(中略) 又、戦争が

済んでから鈴木様を呼んで話を聞いて下さい。

これを読む頃には、私は早敵艦に見事突当つてゐる事でせう。幾ら書いても切り無き為この辺にて最後の最後の筆を留めます。

父母様始め皆様只々も御身体御自愛の上御国の為に戦強増産に邁進して下さい。

敬 具

父 母 様

外御一同様

追 伸

私の可愛い雅子、一成、博志、吟子、陽子、清香、身体を丈夫にして、父さん母さんの言ふ事をよくきいて、よく勉強して立派な日本人におなりなさい。

さやうなら

【平成五年十月 靖國神社社頭掲示】

英霊の言乃葉(7)より転載

【解説】

昭和二十年四月六日、神風特別攻撃隊「第一筑波隊」隊員として「爆装零戦」に搭乗、鹿屋基地を出撃、沖繩周辺洋上にて戦死。

『伏見に育ちて』これは齋藤少尉の兄源太郎夫人キンさんとその息子博志氏が、孫や曾孫に添寝して、思い出し思い出し語って聞かせた齋藤家の昔話をまとめた本。

以下は、キンさんの勇少尉の想い出である。

「私が十八歳で嫁にきた時、勇ちゃんには六歳で自分の子供同様でした。姉さん姉さんとなつて、早稲田大学を繰上げ卒業して特攻隊の小隊長として沖繩の海に散りました。若いのに可哀想でした。お嫁さんも決まっていたのに…」

勇ちゃんの戦死したのは四月六日、お嫁さんは東京の鈴木さんの娘さんでしたが、その年の八月に急性肺炎で勇ちゃんの名を呼び通して亡くなりました。

勇ちゃんの遺骨といつても名前を書いた紙切れ一枚でしたので、骨箱に二人の名前を書いて一緒に入れ、齋藤家の墓地に納めました。

勇ちゃんの十三回忌に沖繩の北霊塔に参つてきました。その時、般若心経の写経を持参したのですが、奉納できず残念ながら持ち帰りました。

海は青くきれいで、この海に突入したのかと思うと涙が出て困りました。ジツチャンとバツチャン(註・勇少尉の両親)はどんなに悲しかったことか察しられます。

勇ちゃんの遺書がみつかりましたのでのせました。戦死前夜、一人部屋にこもり、明日の出陣を前に故郷を思い両親、兄弟、甥、姪に書いた手紙です。出征して二年、三沢まで飛んできたのですが、空襲がはげしく札幌まではこられず引返して、一度も親、兄弟に会うことができずに戦死したのです。どんなに悲しかったことでしょう。涙で涙でこの手紙を読み胸がはりさけるおもいです。

【いざさらば我はみくにの山桜より転載】



家族とともに